

転法輪堂（釈迦堂）（重文）

西塔の中心本堂。釈迦堂または西塔中堂とも呼ばれる。最澄から直接薫陶を受けた二代目天台座主円澄（えんちょう 771～836）が西塔地区を開き、転法輪堂を建立した。本尊は最澄が東塔北谷の霊木で自ら刻んだ釈迦如来像。内陣の石畳が参拝者の位置よりも低くなっており、本尊が参拝者と同じ高さになるようになっている。これは天台様式の仏堂の特徴であり、東塔の根本中堂と同じである。

一時期荒廃するが、良源（りょうげん 912～985）により復興整備される。天下統一を目指した織田信長（おだのぶなが 1534～1582）による元亀二年（1571）の焼き討ちで焼失した後、1595年に詮舜（せんしゅん 1540～1600）が信長の後を受けて天下統一を果たした豊臣秀吉（とよとみひでよし 1537～1598）に再興を願い出、三井寺の弥勒堂がこの地に移築された。建物は貞和三年（1347）に造られたもので、比叡山に現存する仏堂では最古のものとなっている。